

千原光雄：パーペンフス先生を悼む Mitsuo CHIHARA: George F. PAPENFUSS
(1903-1981)



アメリカ、カリフォルニア大学（バークレイ）の名誉教授で国際藻類学会会長のジョージ・F・パーペンフス（George F. PAPENFUSS）先生が冠状動脈血栓のため1981年12月8日未明に享年78歳で亡くなられた。私たちは世界の藻学の分野における最も秀れた指導者を失った。

パーペンフス先生は1903年11月4日に南アフリカのハリスミス（Harrismith）で生まれ、郷里の中学・高校を終えられた後に渡米してノースカロライナ州立大学農学部で植物学を学び、1929年に最高成績の学生として卒業された。その後、ジョンホプキンス大学の大学院に入られ、1933年に PhD を得られた。学位論文は「褐藻シオミドロの生活史の研究」で、研究は主としてウツホルム臨海研究所で行われ、論文は Science や Botanical Gazette に発表された。Notes on the lifecycle of *Ectocarpus siliculosus* DILLW. Science, 77: 390-391 (1933); Alternation of generations in *Ectocarpus siliculosus*. Bot. Gaz., 96: 421-446, 13 figs. pls. 6, 7. (1935).

学位を取得された後、しばらく母校のジョンホプキンス大学師範部の助手等をされたが、後にポストドクトラルフェローシップを得てスウェーデンに留学され、ウプサラ大学（Uppsala）と Lund 大学（Lund）で、それぞれ当時の碩学であった N. SVEDELIUS 教授と H. KYLIN 教授から藻類、特に海藻の研究の指導を受けられた。この留学期間中に得られた知識と体験は、

その後の藻学研究ばかりでなく、パーペンフス先生ご自身の人生にも大きい影響をもたらしたといわれる。この期間に挙げられた研究業績のうち、紅藻カラゴロモ類の体構造と生殖器官についての論文 The structure and reproduction of *Claudea multifida*, *Vanvoorstia spectabilis*, and *Vanvoorstia coccinea*. Symbol. Bot. Upsaliensis II: 4, 1-66 (1937) はよく知られている。留学から母国南アフリカへ戻られた先生は、ケープタウン大学の講師として勤務をされたが、また盛んに南アフリカ沿岸の海藻の採集、調査、研究を同僚の MARY A. POCKOCK 博士等と行い膨大な標本資料を蒐集された。それらの資料の多くは現在カリフォルニア大学バークレイの標本室に保存されている。研究のために再びスウェーデンに渡られたパーペンフス先生は、しかし間もなくアメリカ、ハワイ大学に職を得ることになる。この時第二次大戦の戦禍のため先生は汽車でソビエトを横断され、船で日本を経てハワイに向われたという。1940年であった。ハワイ大学では植物学の助教授として勤務されたが、1942年に二年間のフェローシップを得られ、再びアメリカ本土に渡り、後に永久の勤務の場所となったカリフォルニア大学（バークレイ）の植物学部で海藻の研究に専念された。その後、先生の業績は高く評価されることとなり、1944年に、さきに1943年に亡くなられたセッチェル教授（W. A. SETCHELL）の後任に指名され、同大学の助教授に採用された。その後の昇任は順調で、4年後には副教授に、さらに5年後の1953年には正教授となられ、1971年に停年退職されるまでここに勤務された。なお、先生は、1945年にアメリカ市民権を得ておられる。

カリフォルニア大学バークレイ時代以降のパーペンフス先生の藻類学界における活躍と研究業績については多くの読者の知るところと思われる。先生には単独の著作はなかったが、多くの研究論文のほかには下記の分担執筆がある。SMITH, G. M. ed. Manual of Phycology (1951) の中の褐藻植物の章 (pp. 119-158), A century of progress in the natural sciences, 1853-1953. Calif. Acad. Sc., San Francisco (1955) の中の藻類の章 (pp. 115-224) など。カリフォルニア大学に職を持たれてからも研究の主力はかって調査と採集に専念された母国南アフリカの海藻誌の完成で、その成果は随時 Notes on South African

marine algae や New marine algae from South Africa などの題名で発表された。筆者は在米中にその研究の一部を担当してお手伝いをしただけに完成を楽しみにしていた。しかし、先生は南アフリカ海藻誌を完成することなく逝ってしまった。惜しんでも余りがある。

パーペンフス先生はまた藻学の分野の考証に秀れ、藻類の学名等について数多くの疑問を解決された。この方面の研究は門下生の P.C. SILVA 博士により一層の進展を見るにいたっている。

パーペンフス先生の藻類学界における最も大きい功績の一つにカリフォルニア大学パークレイにおける藻類研究の一大スクールの確立がある。前任者のセッチェル教授とガードナー教授 (N.L. GARDNER) が開拓された場に見事なパーペンフス学派を誕生させ、ここをして世界の藻類研究の一大中心地とするにいたった。現在、世界で藻類研究者が最も多く訪れるところの一つはパークレイであると思われる。ここからは多数の秀れた藻類研究者が門下生として育った。大学院をここで学び、パーペンフス先生の指導で PhD を得た方達を記すと次のようである。I. A. ABBOTT (紅藻クリプトネミア目の形態と分類), L. E. EGEROD (ハワイ産の管状緑藻の分類), R. F. SCAGEL (紅藻フジマツモ科-背腹性のメンバーの形態と分類), F. S. WAGNER (紅藻コノハノリ科の形態と分類), P. C. SILVA (緑藻ミル属の分類), R. E. NORRIS (紅藻ツカサアミ科の形態と分類), S. R. SPARLING (紅藻ダルス科の体構造と生殖器官), J. R. STEIN (緑藻ゴニウムの種分類学), K. C. FAN (紅藻テングサ目の形態と分類), M. H. HOMMERSAND (紅藻イギス科とフジマツモ科の形態学), R. B. SEARLES (紅藻スギノリ目の形態と分類), H. W. JOHANSEN (有節サンゴモの形態と分類), M. J. WYNNE (北米太平洋産の褐藻の生活史と分類), Y. M.

CHIANG (紅藻ムカデノリ科の形態と分類), J. RAMUS (紅藻ニセフサノリ属の1種の培養と生活史), J. B. JENSEN (褐藻ヤバネモク属とホンダワラ属の形態学)。私事に亘って恐縮であるが、筆者は1962年春から1964年にかけてカリフォルニア大学パークレイに留学し、パーペンフス先生に親しく藻学研究の教えを受け、そしてその後も数回訪問または滞在の機会をもつことができた。先生は学問には厳しかったが、陽気で、親切で、世話好きで、何事にも誠心誠意、親身になって尽して下さる人であり、しかもそれは特定の人に対してというのではなく、何人にも常に同じようであった。先生が多数の門下生達に慕われ、そして世界のいたるところで友に恵まれたこともむべなるかなの感が強い。

外国からの訪問研究者があれば、宿舎はどうなっているのか、食事はどうか、とわがこのように気遣われ、そして自らマーケットの中をかけずり回るようにされてワインの大びんを仕入れ、それにチーズやフルーツも用意され、研究室の全員を連れて山腹の植物園にでかけ、賑やかな歓迎パーティーをされることのお好きだった先生、国際会議には必ずといってよく出席され、誰にでも気さくに声をかけられ皆に親しまれ愛された先生、常に藻学の進歩と発展を願い、お亡くなりになる日まで国際藻類学会会長として、また8か月後に控えた第1回国際藻学会議の会長としてその開会に力を尽された先生を私たちはもう見ることはできない。しかし先生を知るすべての人々の脳裏からにこやかなパーペンフス先生のお顔は消え去ることはないと思われる。先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。なお、ご遺族には夫人の Mrs. G.F. (Emma Jean) PAPPENFUSS とご子息の Theodore J. PAPPENFUSS がおられる。ご多幸をお祈り申し上げます。

(305 茨城県新治郡桜村 筑波大学生物科学系)

田中 剛: G.F. PAPPENFUSS 先生の思い出 Takeshi TANAKA: Professor PAPPENFUSS (1903-1981), in memoriam

旧臘、米国カリフォルニア大学の P.C. SILVER 博士からのお便りで、同大学の名誉教授の PAPPENFUSS 先生が12月8日未明に逝去せられたことを知り、突然のお知らせに只今驚きと痛惜の念で一ぱいのところである。大分以前のことになるが、私は1958年9月から翌年4月までの間、カリフォルニア大学の Research associate として PAPPENFUSS 先生のもとに留学し、研究の機会を得て、先生には公私ともに一方ならぬお

世話とご指導を賜わった。今はなき先生のなつかしい面影がしのばれるので、ここでは当時の思い出をたどり、その中から二、三の事がらを記したいと思う。留学当時の1958年頃は、先生はカリフォルニア大学の植物学教室の主任教授として、研究以外に大学の色々な役員をして居られ、校務に奔走されて居られた。また学生の進学、進路指導の担当もして居り、一人一人の学生を自室に呼んで、長時間懇切丁寧に助言と指針の

相談役をつとめて居られた。教官室の前の廊下に多くの学生が常時列をなして番を待っている光景を見て先生の教育者としてのその熱意と誠意に先づ感服されたことであつた。先生の門下生に数多くの有名な藻類学者が輩出しているのもなる程とうなづけられた次第である。

この藻類学研究室については既に広く世界に知られていて有名で、故 W. A. SETCHELL 博士や N. L. GARDNER 博士を初めとして数多くの有名な学者が居られた所で、その施設も全く完備されていたのには驚かされた。先生は当時大変ご多忙であつたので、私は先生に接する時間が割に少なかったが、SETCHELL 博士の研究室や膳業室、更に Type 標本室でも自由に使用する様にとのことであり、私は日本から持参した海藻類の標本を比較検討する事が出来て、広い知見を得て大変有意義であつたと思つている。

先生のこれまでの藻類に関する業績は膨大なもので、これについては別の方面で発表されることと存ずるのでここでは省略したいが、私の留学中に先生の主要論文について、その要点や問題点等についてじかにご意見を伺えたのは大変幸運であつたと思つて昔をしのんでいる。私が持参していった日本の海藻類の標本類についても先生は色々と多くのご助言とご意見を下さり、今後の研究の指針と更に一層これを推進する様に激励して下さいました。それらの中の二、三の例をあげて見よう。1. 日本南海産海藻類、*Bryopsis*, *Enteromorpha*, *Caulerpa*, *Dictyota*, *Eusargassum*, *Euclima*, *Bostrichia* 等の属や亜属の分類学的再調査研究、2. 紅藻類、*Exophyllum*, ハナヤナギ、トサカノリ、イバラノリ属等の雌性生殖器官の初期構造とその分類学的位置の再検討、さらに細かいところでは 3. 日本産ホソバナミノハナの学名についての再検討等々（私は本邦産のホソバナミノハナは *Chondrococcus hornemanni* (MERT.) SCHMITZ でないのではないかと思つている。）

先生は日本には数回来訪された様である。東京で開催の第11回太平洋学術会議（1966年）や札幌で開催の第7回海藻会議（1971年）に出席された折は会議後のエクスカージョンには一緒にお供をし、また太平洋学術会議後には鹿児島大学にも立寄って戴き、教室員一同と色々お話をお伺いする機会が得られた。

博士ご夫人は確か動物学を専攻された様に承つたが、当時夫人は保育所や社会福祉施設等々に、社会奉仕活動を熱心に多忙にやられて居られ、それにもかかわらず、お宅に再三お招きを戴き厚いご接待を戴いたのが思い出される。また一人のご子息は当時ハイスクールの学生で、学校では演劇活動を熱心にやられて居られ、お宅では広い動物飼室温室が作られていて、南米やアフリカ産等の珍しいへびやカエル類等が数多く飼われていた*)。先生は旅行されることは当時殆んどなかったが、ただ年末に珍らしく一週間程留守されたことがあつたが、どうもご子息と一緒に動物採集か蒐集に出かけられたとのことを教室員の一人から後で聞いて、先生の子煩悩の一面を伺えてはほほえましく感じた次第であつた。またお正月の二日には先生は研究室に出勤して居られて、仕事を始めて居られるのには驚いて感心したところであつた。

先生と最後にお会いしたのは、サンタバーバラ市の第9回万国海藻会議(1977年)の折で、今後また必ずお会いすることを約束したが、これが先生との最後の会話となつてしまった。

広い学識と視野を持たれしかも人間味あふれる大学者の恩師 PAPPENFUSS 先生を失つてはなはだ残念であるが、今は先生のご冥福とご家族の今後のご多幸を心からお祈りしている次第である。

(890 鹿児島市田上町1696-10)

*) ご子息の Theodore J. PAPPENFUSS 氏はカリフォルニア大学(パークレイ)で動物学を専攻され、現在同大学に勤務されている(編集部註)

カリフォルニア大学名誉教授故 G.F. PAPPENFUSS 博士を記念して下記の基金事業が発足した旨同大学の P.C. SILVA 博士より知らせがありました。以下に全文を掲載します。

The George Frederik PAPPENFUSS Memorial Fund has been established for the purpose of maintaining, developing, and facilitating the use of the phycological resources of the Herbarium of the University of California at Berkeley. Contributions should be made payable to the Pappenfuss Memorial Fund, U.C. Berkeley, and sent to the Development Office, 2440 Bancroft Way, Berkeley, CA 94720, U.S.A.

賛助会員

- 北海道栽培漁業振興公社 060 札幌市中央区北4西6 毎日杉幌会館内
 阿寒観光汽船株式会社 085-04 北海道阿寒阿寒群町字阿寒湖畔
 海藻資源開発株式会社 160 東京都新宿区新宿1-29-8 財団法人公衆衛生ビル内
 協和醗酵工業株式会社 バイオ事業本部 バイオ開発部 100 東京都千代田区大手町1-6-1
 大手町ビル
 全国海苔貝類漁業協同組合連合会 108 東京都港区高輪2-16-5
 K. K. 白壽保健科学研究所・原 昭 邦 173 東京都板橋区大山東町32-17
 有限会社 浜野顕微鏡 113 東京都文京区本郷5-25-18
 株式会社ヤグルト本社研究所 189 東京都国立市谷保1769
 山本海苔研究所 143 東京都大田区大森東5-2-12
 秋山 茂商店 150 東京都渋谷区神宮前1-21-9
 弘学出版株式会社 森田悦郎 214 川崎市多摩区生田8580-61
 永田克己 410-21 静岡県田方郡菰山町四日町227-1
 全漁連海苔海藻類養殖研究センター 440 豊橋市吉田町69-6
 神協産業株式会社 742-15 山口県熊毛郡田布施町波野962-1
 有限会社 シロク商会 260 千葉県市春日1-12-9-103